

## 今月の PICK UP

『中野のお父さん』北村 薫／著 文藝春秋 913.6 円



6月16日は父の日ですね。さて、どんなお父さんが登場するのでしょうか。都内で1人暮らしをしている出版社勤務の田川美希。職場で本や小説にまつわる小さな「謎」が起こると、中野の実家に行き高校教師の父親に相談します。美希の話の聞いただけで答えを導き出す父親。豊富な知識と抜群の推理力の持ち主ですが、娘には、パンダみたいにごろごろしているただのオヤジ、と言われており、その人柄とともにギャップも魅力です。軽口をたたきながらも父親をリスペクトしている娘、娘が帰ってくると嬉しくて仕方ない父親、母親も交えた3人のやりとりはなんともほほえましい限りです。シリーズもあります。

『イラスト&図解 知識ゼロでも楽しく読める! 化学のしくみ』竹田 淳一郎／監修 西東社 430 円



私たちの生活にはたくさんの「化学」があふれています。ガスやプラスチックはそもそもどういった物なのか、蛍のおしりはなぜ光るのか、電子レンジはどうやって食品を温めているのか、カメラはフィルムからデジタルへどう進化したのかなど、身近な化学の話が84個収録されています。イラストを交えて分かりやすく端的に説明されているため、化学の知識がなくともちょっとしたスキ間時間に楽しく読めます。

司書の  
おすすめ

『変わる日本語、それでも変わらない日本語』塩田 雄大／著 世界文化社 810.4 円

言葉は時代とともに変化しています。また、世代間や地域間でも意味のとらえ方が異なる場合もあります。この本では、いくつかの日本語の例を挙げ、現在では実際にどのような使われ方をしているのかを調査し、その結果から見えてくる日本語の現状を紹介しています。「週末」は何曜日を指すのか、「初老」は何歳であるのか、映画館で「号泣」できるのか、「一両日中」とはいつまでか、「割愛」するのはどのような場合かなどから、日本語の「いま」を探ります。



『日本の化粧の変遷100年』資生堂ビューティークリエイションセンター／監修 玄光社 383.5 円



「切れ長の目を生かしたエキゾチックメイク」や「バブル期のお嬢様メイク」など、かつて流行したメイクをご存じでしょうか? この本では、この100年に見られる化粧法12タイプを、1人のモデルさんによる写真やイラストで紹介しています。化粧の方法によって大変印象が変わり、化粧の効果を感じていただけるのではないのでしょうか。また、合わせて解説されている時代背景についても興味深く読むことができます。

『<sup>あだな</sup>王の綽名』佐藤 賢一／著 日経BP 日本経済新聞出版 288.4 円

中近世のヨーロッパには、同じ名前を持つ王がたびたび現れました。獅子心王リチャード1世、雷帝イヴァン4世、太陽王ルイ14世……それぞれの王を区別するために付けられた綽名は、その王の人となりだけでなく、時にその国、その時代のあり様までを浮かび上がらせます。著者は、ヨーロッパを舞台にした歴史小説を数多く執筆している直木賞作家の佐藤賢一さんです。美しいものから俗っぽいものまで、55人の王の綽名が紹介されています。

